
貴く翔べ

風雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴く翔べ

【Nコード】

N5984Z

【作者名】

風雷

【あらすじ】

突然、異世界に放り込まれたらどうしますか？ その世界が耐えられないほどに理不尽だったらどうしますか？ あなたは、それに立ち向かいますか？ 【更新状況】 2011/12/20 第一章
完結

第一章「原初の声」(1)

湯山翔ゆまかけるという男がいる。よく間違えられるが、「ゆやま」ではない。

背は高く、瘦そつく軀である。目つきが少し悪いが、笑うと大きな笑窪えくぼができる。鼻筋がしっかりしていて、よくみると美顔であるようにもみえる。ただ、猫背なのと腹から声を出さないせいで、彼を遠くから見た人は、なにやら陰気な印象を受ける。

話してみるとわかることだが、非常におしゃべりで、自分の得意な話題になると何時間でも話し続ける。相手が聞いているかいないかはどうでもよいらしく、それもそのはずで、彼は話しながら自分の考えをまとめる性質たちなのだ。その典型として、他人の話 特に自分が興味を持ってない話題 を聴かない。会話イコール思考であるこの人種は、実に自由詩的な つまるところ非機能的な 思考回路を持つているのだが、それ自体が言語を超越した自己完結に終始しているために、論理立てての熟考やディベートなどに関しては哀れなほどに無能だ。この手の人間は自分の知らないところで敵をつくるが、どこか憎みきれない一種の愛嬌あいさようも持ち合わせている。

湯山は本が好きだ。

とはいえ、小難しいものは読まず、やや現実離れた歴史ものなどは彼の嗜好しこうによく合っている。

二十六という年齢は、冒険や幻想を現実を持ち込みたくなるくらいに憧あこがれるには、随分と遅い。故に彼は、精神が子供じみた憧憬しょうけいを脱ぎ捨てることなく年を重ねてしまった者の一例として、書物から故人の生き様を知り、それを楽しむ事で自分の人生の心細さを慰めている。暇な時間に歴史小説などを取り出して、それを読むくらいでしか、湯山は生きる虚しさを忘れる術を知らなかった。

「湯山の血は古いぞ」

と、足が悪いくせに未だに警備員の仕事を続ける父が、酒臭い息

と一緒に吐く言葉が、湯山にとってはやりきれないことがある。

どうやら、湯山家は何代か前には大陸に住んでいて、遡ればどこかの王家に繋がっているらしい。父が言うには、湯山はもとは唐山とうざんであり、これは大陸の洒落しゃれた呼び名である。

「アホくさ……」

湯山家の現状を知れば、彼の嘆きもわかるだろう。何百年も昔の王侯貴族の後裔こういらしいこの家は、どう考えても豊かではなく、当の父は安月給の警備員で朝も夜もなく働いており、派遣社員を勤める湯山自身も、ひとつどころに留まることもできずに、昨日知り合った相手に顎あごで使われる日々をすごしている。

その癖、父から実を伴わない家格ばかり言い含められたせいか、妙に誇り高い。

分不相応というべきだろう。幼い頃、少しばかり勉強ができたことで、母が期待をかけ過ぎたせいもあるが、とにかく湯山は高校時代に挫折を味わい、大学に進学しても周囲に溶け込めずに、学費を稼ぐという名目でアルバイトに打ち込み、ついには退学してしまっ

た。

それでいて人に使われたくないという戯言たわごとを抜かす男に、何かを報いるという機能を、世間は持っていない。

「もうちょつと高けりやなあ……」

給与明細を破り捨てながら、つぶやく。湯山はこんな男だった。

世間が自分の能力を生かすように出来ていないのだ　と思うほどには、湯山は世間知らずではない。人の能力とは、その者が革命家か芸術家でもない限りは、人間社会にどう適応するかで優劣が決まる以上、右の言葉は自分の無能を棚さかに上げて、賢さかしらに叫んでいるに過ぎない。そんな恥ずかしい真似をしでかすほどには、この男は馬鹿ではない。

誇り高いと書いたが、周囲から見るとそうでもない。他人に馬鹿にされても、へらへらと笑っているだけで、およそ湯山の周囲の間はこの男が怒っているところを見たことがない。ただし湯山本人

は自分が短期であることを自覚しており、それが露わになるような状況を常に避けている。

湯山は自分が時々わからない。

あなたはこうなのよ。

と、やさしく　あるいは厳しく、指し示してくれる恋人や友もない。彼らも多分、湯山のことがよくわからないのだろう。だろ
うどころか、面と向かって言われることすらある。

「　てめえは自分のことがわかるのかよ？」

そうやって言い返してみるが、はつきりいって湯山にはどうでもよかった。自分のよくわからない箇所、というのは何やら気宇の大きな人みたいで、どこか好いていた。こういう意味では湯山は自分が好きな人間である。

彼にとつての一大事は、よくわからない自分のことではなく、生きていることに退屈を感じ始めた自分がいることだった。

以前はインターネット上で特定の人物がバッシングされているのを見ても、祭気分で無意味に騒ぎ立てる連中に腹を立てたが、最近
は彼らに近い視点でもものを見るようになった自分に気づいた。

滅びろ。滅びろ……

自分が下衆な趣向を喜ぶようになったことよりも、人の不幸を楽しむ理由がただの退屈であったことが、はつきり言って湯山には苦痛だった。

「つまらない……」

自分の生き方が、何よりましてつまらない。

退屈は人類の敵である。

と、いいたいくなるのは、湯山が　その小心さからはちよつと考
えられないが　面白さ目当てに悪事に手を染めたことだ。

勿論、当の本人は金目当てのつもりだが、少し頭を働かせれば、
ほんのはした金を得るのにわざわざ危険と罪悪を同時に担ぎ込む必要はない。こういったものに首を突っ込む楽しさは、大抵の人間は

十代の頃に脱ぎ捨ててしまふのだが、平穩かつ陰鬱な学生時代を過ごしてきた湯山にとって、これは眩まぶしいくらいに新しい体験だった。
（悪いことをすれば、いずれ捕まる……）

捕まるのは悪事を続けるからだ、湯山は思い込んだ。なに、右も左もわからない老人から小遣いを貰うだけだと、湯山はかすかに芽生えた罪悪感を握りつぶした。

（俺は器が小さい……）

と、湯山が頭を抱えなくなるくらいに悩んだのは、老人をだまからかして小金を得たことではなく、結局のところ罪悪感に耐えかねた自分が、盗んだ金を丸々老人に返してしまったことだ。無論直接ではなく、郵便受けにしのばせるという、いかにも小心丸出しの方法で。

「退屈でなけりやあ、良いのさ」

自分を慰めても虚しさは止むどころではなく、さらには冷や汗をかくほどに怖気おしけづいているのは、彼が同じく悪事に手を染めた仲間を裏切ったからだ。湯山の知り合いの中でもずいぶんと性質の悪い男で、今回の失敗をだしにこれから付きまとわれるようになるかもしれない。

（逃げたい！）

と思つたのは一瞬で、すぐに腹が据わった。熟考して覚悟を決めたのではなく、思考を停止することで結論を早めたのだ。湯山にはこつという想像力の欠陥からくる樂觀癖がある。

第一章「原初の声」(2)

いつものようにボロ車を出して会社へと向かう途中だった。

案の定、例の悪友につけまわされた。

悪友にも彼なりの事情がある。こういった悪い話を手軽に持ち込んでくる輩は、往々にして他にも繋がりをもっており、湯山ゆまが失態を犯したせいで責任を追及される立場に陥った。湯山の人の良さにつけこんで、とりあえずは利用してみたが、彼も流石に人選を誤ったことを後悔した。

(脅すか……)

窮まれば湯山から金を^{むし}り取ればいい。あんな小心な男、少し脅かしてやれば、自分可愛さに誰でも騙だます様になるだろう。出来なければ湯山の親をゆする。それだけの単純な作業だ。

「まずは挨拶代わりだ」

そういつて、悪友は湯山の乗る車を追い回した。この行為自体に大した意味はないが、湯山の恐怖心を煽あおり、「この男からは絶対に逃げられない」という強迫観念を植え付けるために必要な、一種の儀式である。

湯山がバックミラーから覗き込んだのは、そんなことを事も無げにやってのけようとしている悪友の姿だった。鼻筋と目が細く、長い顔である。嗤わらうと目元に怪しいしわが出来る男だ。

「木田きた、てめえ。嗤わらつてやがる！」

心のどこかで悪友のことを軽蔑してきたせいか、恐怖よりも先に怒りが立った。

会社までついてこられては叶わないと、信号が切り替わるとともにアクセルペダルを勢いよく踏んだ。早朝であることもあって、少し混み気味だが、下手に空いているよりは撒まきやすい。湯山は強引に割り込みを繰り返して追尾する木田を振り切ろうとした。だが、相手もこういった手合いはお手の物だろう。吸い付いたように離れ

なかった。

しきりに携帯電話が鳴っているが、見ずともわかる。次第に双方ともなりふりかまわなくなった。あたりの目を憚らずに猛追と逃走を始めた。

流石の湯山も退屈を捨て去った自分を感じる暇はなかった。大抵、退屈を嘆く人間というのは本質的に平穩を愛しており、しかし時間の使い方という、人間の価値そのものとも言うべき点において、哀れなほどに無能あるいは無頓着な場合が多い。湯山もその一人だった。

携帯電話が鳴っている。

「あれ？」

違和感。

これ以上にならないほどに非日常にいるのだから今の湯山は違和感で埋め尽くされているといつてよい。それにすら慣れ始めた頃、湯山は眼前に最も訝しい現象を見つけた。

（こんな音、俺じゃないぞ……）

携帯電話がけたたましく鳴っている。それが木田からのものであることは間違いない。だが、その音とエンジン音に混ざって、脳を貫くような裂音が聞こえる。

（いや、やっぱり携帯が鳴ってる）

耳障りなアラーム音に混ざって、それは確かに聞こえる。木田のせいで携帯電話が壊れたと思った湯山だったが、つい気になって、手にとってしまった。

「朝っぱらから一体何なんだよ。てめえはよ！」

車内に湯山の怒号が響いた。

だが、繋がった先は木田ではなかった。

……こそ

風鈴の音のような細かい音が静かに響いた。どうしようもないほどの目まぐるしさの中にいるのに、どういっわけか、湯山はそれを聞き取ってしまった。

「こそ？」

顔が熱を帯びてきた。自分の発した言葉がどこかでこだましているような感覚がする。

……こそ……よ……そ

（女の声……いや、子供か？）

それも一人とも思えない。受話器の向こう側に数人の気配のようなものを、湯山は感じ取った。

すう　と、あたりが静かになったと思ったのは、湯山の神経が片手にとった携帯電話に集中していたからだ。だが、次の瞬間、湯山を覆っていた静けさが一気にはじけた。

……よう……こそ……うこそ……ようこそようこそようこそ……

「うわぁ！」

叫ぶと同時に、目の前が真っ白になり、暗くなった。

どこだ。ここは？

などという、古典的な台詞を吐くようには、湯山は出来ていなかった。

「おおお？」

奇声なのか悲鳴なのか、どちらつかずの声をあげた湯山はみだりに車外に飛び出すような真似はしない。

何せあたり一面荒野である。所々、茫々はらばらと草が茂っていて、他はやや乾いた黄土が見える。もちろん、道路らしきものはない。上を向けば、雲ひとつない、死んだように蒼い空が広がり、太陽の光だけが異様にまぶしい。

ほんの数秒前まで、都心を車で走っていた自分が、何故こんなところにいるのか。

（神隠しか、死んだかだな　　）

後者だとすれば、あの世も随分と殺風景なところだ　と、湯山は鼻で嗤った。別に湯山は抜けているわけではない。もし傍に道連

れになった誰かがいたとしたら、その者に抱きついて絶叫しただろう。

たった一人である　ということが、湯山がパニックを起こさない唯一の理由だった。とはいえ、周囲に自分と同じように、この怪異に巻き込まれた人がいないかは、静かな雰囲気とは裏腹に顔を蒼白にして確認した。この男が他人からよくわからないと言われる所以のひとつは、自分の表情を自覚していないことだろう。周囲を一望して誰もいないことを確認すると、小さく嗤ったのだ。

勿論、こけおどしだ。こうやって自分で自分を励まさなければ、どうにかしてしまいそうだ。

木田を撒けた。

という事実によって得た安心も少しはあった。最悪の状況を考えれば、見も知らぬ土地にいきなり迷い込んで、しかも木田と二人きりという可能性もあった。この期に及んであんな顔を見ずに済むなら、ひとりの方が良い。

ふと、携帯電話を手にとって見てみた。あまり期待していなかったが、電波は届いていない。最後の着信は木田になっており、あの妙な女が子供のような声は何だったのかは想像すら出来ない。

少し、車を走らせてみたが、凹凸のひどい地面のせいか、すぐにエンジンを起こした。無闇に燃料を消費するわけにはいかず、冷房を切ったために、燃えるように暑い。それでも湯山が車外に出なかったのは、ひとつは草陰にたむろする狼の群れを遠望したからだ。

「はは、洒落しゃれになつてねえや……」

ようやく、と言うべきか、湯山は事態の深刻さを飲み込んだ。

全く未知の世界に放り出されたわけだが、せめて（木田以外の）人の姿を見つきたい。

しばらく走ると、日が暮れてきたので、湯山は車内で夜を過ごすことにした。勿論、周囲の景色は一面の荒野であることには変わらない。

それでも何か心細かったのか、地面から生えたような大岩の傍に

車を停めた。樹木の傍は虫に集^{たか}られそうので気がすすまなかった。

「隣、空いてますか？」

などと、大岩に向かって空元気に話しかける姿は、もはや哀れですらある。

昼食にとるはずだった安い菓子パンを口に放りこみながら、湯山は考える。この暑さではすぐに腐ってしまうから、明日の朝食に残すことは考えなかった。ただ、ペットボトルに半分ほど残った水は節約した。

（突然、地球の裏側に飛ばされたか、異世界ファンタジーか、あるいはタイムスリップといったところか。あ、あの世って線もまだあったな）

自分の置かれた境遇にあたりをつけようと始めた想像は、夜陰の中で砕かれた。

風音もしない夜の闇の中で、小さく煌^めく光の群れを見たとき、湯山はなにやら怖^{おそ}気だちそうな自分を励ますように、いくつか浮かんだ言葉の中で、最も雅味のあるものを選んだ。

（蚩かな……）

湯山は、光の群れが移動しているらしい事になかなか気づかなかった。それらは徐々にこちらに近づいていた。それに気づいたとき、湯山が動転しかけたのは、余裕のある言動とは裏腹に、この男の精神がつつけば破裂するほどに緊張していた証拠である。

誰かいる……誰かいるよ。

耳元でささやくような声が聞こえた。いや、果たして声であったか。自分の耳が何かを捉えたという感覚はない。直接頭に響いてくる言語を超えた何かは、湯山がこれまで一度も体験したことのない不愉快な現象だった。

後部座席のシートを倒してくつろいでいた姿から、一瞬で起き上がると、慌ててキーを回し、エンジンをかけた。

旋回するまで、隣席を失礼していた大岩に二度ほど尻をぶつけた。湯山は百八十度回転すると、真っ直ぐに走った。

しばらく走らないうちに、段差に乗り上げた。ライトをつけているが、こうもただっ広い場所では十メートル先が見えたところで何の意味もない。

ふふっ……慌てる。

慌てるよ。

頭に直接響いてくる声らしきものは、どうやらその光から放たれていることを湯山は感じ取った。脳を撫でるような意思の切れ端が、陽光が分解されて七色に見えるように、いくつかの色を伴っているようにも思えたからだ。

（さっきの声だ……）

携帯電話から聞こえた常軌を逸した多数の声。いや、あれは声であつたか。今と同じように直接頭に響いてきたのではないかと、そこまで思念をめぐらせた湯山だったが、ついに車を捨てて奔り出した。夜光でも照らしきれないただっ広い荒野に単身飛び出したのだから、これは逃走というよりは狂走であつた。

あ、逃げた。

逃げたわね。

光は迷うことなく湯山を追尾してきた。

湯山は脇目もふらずに奔った。だが、ここは彼の歩きなれた、神経質なほどに平らに舗装された道路ではない。地が平坦であるというのは人界だけの話であり、荒野の地面はジャガイモのようにぼこぼこでとても人が歩けるようにはできていなかった。何故、広大な世界に人はわざわざ道という線を引くのだろうと、幼い頃疑問に思つたことがあつたが、文明に浸かりきつた人類は自分が平らにした道しか歩けないという事実をここで痛感した。自分がいかに文明を享受した人間であつたか。

凹凸に足を突っ込んで転ぶよりも先に、湯山の足腰が悲鳴を上げた。一歩踏み進むごとに足首が砕ける錯覚をおぼえるほど、ここは文字通りの荒野であつた。

ついに、しゃがみ込んだ。いや、がむしゃらに走つたせいで、立

ち止まった瞬間に腰から崩れた。呼吸が乱れ、どれほど空気を吸い込んでも足りなかった。

座った。疲れたんだよ。

これで終わりかな、遅い人。

選んで。ねえ、選んで。

光の群れが湯山を囲んだ。

羽虫のようにあたりを不規則に旋回し始めたそれらを見て、湯山は不機嫌に乾いた息を吐いた。

「うるせえ。うるせえよ……」

第一章「原初の声」(3)

湯山は過呼吸で意識が飛びそうになる中、辛うじて周囲を確認した。

黒い画板に白い絵の具を撒き散らしたように不自然な光が周囲を漂っている。それもひとつやふたつではない。

妖精。

という言葉が、湯山の頭に浮かんた。あるいは幽霊や得体のしれない生き物であるかもしれないが、怪談話が苦手な性格もあってか、よくわからないのなら妖精でもいいだろうとも思った。

妖精なら　と、安心できたならば、湯山の精神はよほど大雑把に出来ているといえたが、たとえ呼称を知っていたとしても、現実にはいないはずのそれが突然目の前に現れた事実は、一個の人間を混乱と恐怖の淵^{ふち}に突き落とすには十分だった。

あるはずの物が無い　あるいは無いはずの物がある時、人は多くの場合、恐怖を覚える。事の大小はあれ、自分の信じる世界の物理法則が砕け散ったような錯覚がするからだ。

湯山が辛うじて意識を保っているのは、彼がこのショックに経験があるからだ。ほんの数時間前に自分が体験した奇怪な出来事に比べたら、妖精の存在など取るには足りなかった。

現状、湯山にとつての一大事は、この妖精達が、自分を害するようなことがあるかどうかだ。

湯山が宙を漂う光のひとつを睨^ねめつけて観察していると、周囲から小さな声が上がった。

選ばれた。選ばれたよ。

目が合ったね。

はいいね。はいいね。

全て子供のような無邪気な声であったが、闇の中でのそれはいかにも怪しかった。

湯山が見ていた光が、小さく揺らめいた。すると、蠟燭ろうそくの灯を吹くように、その周囲の光たちが一斉にかき消えた。

ようこそ。

この台詞には聞き覚えがあった。とはいえ、最初に聞いたときは半分パニックに陥ったから良い印象は無い。

「妖精か何かか？」

周囲の光が掻き消えたことは、湯山が精神を安定させるにおいて十分に役に立った。

すう　と、光が近寄ってきたので、湯山は思わず振り払ってしまった。光に触れたという実感は無かったが、振り払った手が怖気だった。

ユマ……

自分の姓を呼ばれた　と感じた時、湯山はこの超常の何かに抗うことへの意味を疑い始めた。

「何で俺の名字を知っている」

湯山の問いには、光は答えなかった。ただ、壊れた機械のように同じ事をつぶやき始めた。つぶやくといっても、湯山の頭の中に直に声に似た何かが響くだけだが。

ふと、湯山はこの光には自我がないのかと思った。あるのは何かの本能だけで、これはそれを行っているだけなのではないか。先に光同士で会話をしていたように感じたのは、湯山がそう思っていただけで、各々が別に湯山の頭に語りかけてきたのかもしれない。

これは、現象なのだ　と、湯山は思うようにした。日が昇れば野一面を朝日が照らすように、この世界では生物という存在以前の何かなのだと思った。

それと符合するわけではないが、湯山は蜻蛉とんぼを誘うようにして右手を差し出した。どういうわけか知らないが、そうすべきだと思った。

湯山に振り払われて迷うように宙を漂っていた光が、指の先に止まった。

こげの
荊を……

湯山が脳内でそう訳すしかない何かをつぶやくと、光は死んだ蜚のように消えた。

自分はこの世界における普遍的な何かを今、受け取ったのだと思つた。誰に聞かれても説明できる自信はないが。

明くる日の朝、湯山はあてどなく車を走らせた。

幸い、給油直後であるためにしばらくは走れる。だが、起伏の激しい悪路は車自体よりも湯山本人に対する負担が大きく、地形の突起の見つらい草原部を迂回し、禿げた地面の続く荒野を走つた。それでも一時間に一回は気分が悪くなり、停車しては車の外でうずくまって吐いた。三回目は吐き出すものは何もなくなっていた。

水が足りない。

小川は見つけた。だが、無用心に川の水を飲むわけにはいかない（それはいざという時だ。俺みたいに頑丈でない人間だと一発でアウトだ）

時々、貧相な木に実がなっているのを見かけたが、それが食用に耐えられるかどうかは分からない。

（つくづく、食い物が向こうからやってくる暮らしをしてきたんだな……）

対価さえ払えばすぐさま食事に取りつける世界が、実は途方もないものであったのではないかと、湯山は思うようになった。

「とにかく、人だ」

人間を見つけないければ話にならない。湯山はこの世界で生きる術を知らないのだから。まずは模範というべきこの地の住人を捜すことが、彼の第一の目標だった。それ以上に、自分という存在を保護してくれる何かを探していた。そもそもこの地に人がいるのかどうかという疑問は捨てた。必ずいる。そう思わなければ正気を保てそうにない。

半日も走らないうちに、車の方が先に音をあげた。燃料が尽きた

のではなく、車体が歪むような悪路を走り続けたことによる。

「お上品な道しか走ってこなかったもんな。中古ワゴンだとこんなものか……」

皮肉めいた台詞を吐いても、虚しいだけだった。自分を外界から守ってくれる強力な夜具も兼ねていたから、これから徒歩で行くことを考えると、途方に暮れた。

（人じゃなくて、食い物を捜すべきだった）

川辺で魚釣りでもして、急場をしのぐくらいの事すら考えつかなかった。第一、食用でないものを体が受け付けないだろうということは、湯山にとっての大前提であった。とはいえ、そこいらに見知った果実がなっていたり、調理された肉が落ちていたりするわけがない。

このような危機時であるのに、そういった甘えの中にあるということは、湯山でなくとも自覚しづらい。

まずは野垂れ死にを回避する方法として、日が暮れるまでにやるべきことを決めた。

（火を焚^たこう）

どうにもやめられない煙草の習慣というものが疎ましくなったこともあったが、今ばかりは感謝した。ライターさえ持っていなければ、火打石以前の旧態で火を熾^{おこ}す羽目になっていたかもしれない。

既に茫々たる荒野は抜け、遠くに山霞が見える。近くに小川もあり、所々木々が茂っていた。

枯れた枝葉をたんまりと拾ってきて、湯山は小さな焚き火を熾すと、寒くもないのにそれに手を当てながらしばし考えた。

（人間は何故、山から下りたんだろう……）

短時間であれ平野をさまよった感想といえば、途方もなく広い場所には食料もなく、水もなく、それに比べれば山など貯蔵庫のごとく禽獣^{きんじゅう}がいて、木の実や水もあるだろう。それを捨ててまで、人は何を求めて平野へ下りたのだろう。

（きつと増えすぎたんだ）

あるとき、山という空間では増えすぎた人種を賄えなくなつたのかもしれない。人は自ら進んで平野に下りたのではなく、追い出されたということになる。湯山のこの想像は無論、何かの書物に立脚したものではなく、彼の勝手な想像である。

煙草に火をつけた時、湯山は車に鍋でも積んでおけばよかったと思った。軽装でないと歩けないと思って、気が付いたものしか持つてこなかったから、食事の役に立つものといえは空のペットボトルだけだ。これでは湯を沸かすことも出来ない。

（いつそ、解体して鍋でも作りやよかったんだ……）

本気でそう思った。今でも生の水を飲むことは怖い。

流石に空腹には勝てず、河で魚を獲ることにした。水を怖がったユマであるから普通に考えれば魚を敬遠しそうなものだが、ここは意を決したと言ふべきだろう。知識がない以上、木の実は危ない。

ちようどいい小川を見つけて、枝と石で堤を作った。子一時間ほど待つと、小魚が堤に入ってきたのでそれを焼いて食った。水藻の臭いがひどく、味も何もなかったが、腹だけは膨れた。

（便所も作らんな）

木の棒を拾ってきて地面を掘った。出来るだけ深く掘りたかったが、土が固く、途中で諦めた。

そうこうしているうちに日が暮れた。次第に寒気が下りてきて、湯山は車に積んであった毛布に包まったが、ここにきて車を捨ててきたことを後悔した。

（火を絶やさないとだ……）

野天の下で熟睡できるはずもないから、目が醒める度に焚き火に枯れ枝を足した。

（雨が降ったらどうする）

なども考えたが、それ以上に押しつぶされそうな疲労感に襲われて、ついには気絶するようにして寝入った。

第一章「原初の声」(4)

「おい」

疲れていたためか体がだるく、湯山は最初、その声に反応できなかった。

「おい、起きろ。風邪をひくぞ」

と、言われて起きたのは、額に何か冷たいものがあたったからであつた。

(雨だ……)

ずぶ濡れになって見る見る衰弱してゆく自分を想像した湯山は、跳ね起きた。

「わっ！」

何かに激突した。

額を押さえて目の前を見ると、自分と同じように額をさすっている男がいる。

(人だ……)

あれほど探し回った人間に出会ったというのに、湯山は安心しなかった。というよりも、警戒した。男の身なりが、多少は湯山も想像していたが、自分の衣服とかけ離れていたことと、どうやら一人ではないらしいことに気づいたからだ。

男は、湯山が中国の時代劇で見たような黒い衣をまとっていた。

縁が最も黒く、他はやや色が浅い。髪は後ろに長く纏めていて、スーツ姿に短髪である自分が周囲から完全に浮いていた。

既に火が消えた焚き火を囲んで数人がいた。皆、湯山と額を激突した男と同じ身なりだった。

湯山が目ざとく見つけたのは、彼らの主か何かが乗っているらしい馬車だった。湯山はこの光景だけで、この世界の人間が、主と従を厳しく区分する何かから抜け切れていない蒙^{くも}さを持っているような気がした。この予想が彼を最も警戒させ、しかも後に当たること

になる。

「そこな、旅の人」

馬車の窓にたれたカーテンの中から女の声が聞こえた。その声とともに黒衣の男たちが一斉に跪いた。ひざまず

湯山は奇妙な体験をしている自分に気づいた。

先の男にしろ、車上の女にしろ、喋っている言葉は湯山にとって全く耳慣れないものであるのに、頭の中ではそれが理解できるのだ。ようこそ。

妖精のような何かと触れ合っていた時のように、頭に直接意思を穿つ様な何か。それが全く知らない言語を、湯山が理解することを可能にしている。

（原初に言葉ありき……か）

何かで読んだ一説を思い出すと、湯山は妖精から受け取ったものが何であつたかにあたりをつけた。

男の一人が馬車の扉を開けると、中から一人の少女が現れた。

（紅い……）

髪がやや紅い。少し小柄で、少女のようだが、思わず口元が緩んでしまうような愛らしい顔をしている。目が大きく、可愛げを損なわない程度にそばかすがあり、鼻はこじんまりとしている。衣服は無骨な男たちが蠅はえに見えるくらいに整っていて、青をベースにした幾重かの衣を着重ねている。

「見慣れぬ衣服を着ておられるが、どちらのご出身でしょうか？」

湯山は一人では生きていけない自分を痛感している。寝ている間に雨に打たれていれば、三日もたたずに肺炎を起こし、それをこじらせて死んでいたかもしれない。

ひとまずは行儀のよさそうなこの女に身を寄せることを考えるしかない。どこかの集落に紛れ込んだとして、一から生計を立ててゆく自信など湯山にはない。それよりも、このお嬢様じみた娘に寄生することで急場をしのげれば十分とすべきだろう。

（そのためには、なめられない事だ）

最初から、湯山はそういう目で少女を見ていた。少女にすれば単なる好奇心でこの見慣れぬ男に尋ねたのだが、湯山の方は人知れず必死だった。

「俺にとつては貴方の衣服の方がよほど見慣れない。どちらのご出身か、訊^きいてもよろしいか？」

ぞんざいな口調で湯山が言うと、少女は驚いたようだ。彼女が小さく頷くを見て、湯山は自分に宿った神秘的な何かが、内から外に向けても作用するものであると確信した。

（言葉が通じた……）

一安心した湯山だったが、周囲の男たちの顔が一瞬だけ強張ったのを見たとき、わずかに後悔した。素直に状況を説明し、助けを請うべきであつたのかと。

少女が、小さく笑った。

「これは失礼。わたくしはローファン伯の長女アカアです。この服は我がオロ王国の婦人であれば、誰でもたしなむ程度のもんです」
暗に、この程度のことも知らない貴方は誰なのか　と言われて
いる気がした。だがそこに悪意が感じられないのは、この娘は本当にそれを疑問としているのかもしれないと、湯山は思った。

（正直に言うか。信じられるようには工夫するとして……）

相手にあまりにも毒気がないので、湯山のほうが馬鹿らしくなつてしまった。

伯爵の娘と聞いて多少は気圧された湯山だったが、顔には出さないように努めた。本来ならば表情に出してしまうところだったが、何分顔色が悪く、今の湯山は何を話しても不機嫌そうに映る。

「俺の名は湯山翔。どうやら見も知らぬ土地に放り出されたようだ。乗り物に乗っていたんだが、途中で壊れたので今こうして人里をさがして歩いている」

こういうことを話するとき、湯山はなぜか知らない他人のことを話すように淡泊になる。このせいで聞き手に事の逼迫^{ひつぱく}が伝わらずに損をしたことが何度かあるが、本人はその原因が自分にあることにす

ら気づいていない。

だが、今ばかりはこれが幸いした。少女アカアの関心をひいたのだ。

それに、湯山が思わずやってしまった動作が契機となった。

突然、耳をつく高音がユマの懷で鳴った。彼はおもむろにポケットから携帯電話を取り出すと、前日に目覚まし代わりに設定していたことを思い出しながら、音を消した。

「ああ、気にしないで。ただの目覚ましだから」

湯山翔という人物を強烈な印象とともに相手に焼き付ける効果が

本人ははからずとも　この行為にはあった。

他にも、ユマが煙草を吸う際に使うライターなどは、大いにアカアの好奇心を刺激した。

「ユマカケル殿は術士であられたか……」

そこからは飛ぶように事態が好転した。車上に誘われたのである。湯山が術士とかいうもの　大体想像は付くが　に間違われた上、その後の問答に決定打があった。

「湯山が氏で、翔が名だ」

氏名で呼ばれると、どこか冷たい感じがして嫌な気分になったために、湯山が意味もなくそういったのだが、どうやら氏を持つというのは特別な意味があるらしく、先の携帯の件も合わさって、ユマという男が妙な存在感を持つようになった。

湯山はアカアと臨席した。

お嬢様の気まぐれで道連れになるということが、何を意味するのか、湯山はこの時大した予想を立てなかった。

香を焚いてあるのか、馬車の中の香気にむせ返りそうになった。

「ユマ先生、ユマ先生」

道中、アカアは湯山のことをこう呼ぶ。もうこれ以降は湯山という漢字は必要ないだろうから、彼のことを単にユマと呼ぶことにする。

車上の旅が快適とはいいがたいが、ユマのように歩きなれない人間にとっては天からの恵みに匹敵した。

「このあたりのことが知りたい」

そう言いながら、ユマはアカアにこの世界のことをさりげなく尋ねた。彼女と接してみte気づいたことだが、ユマはアカアが持つ本に書かれた文字を読むことが出来なかった。

「なるほど、言葉ありきだ」

妙なところで感心してしまったが、とにかく、彼女の言ったことで重要そうなものをメモ帳に書き留めた。アカアにはユマの持つものや仕草の全てが新鮮らしく、目を爛々^{らんらん}と輝かせていた。

アカアの馬車に乗るのは一日のうち、ほんの二、三時間ほどで、他はアカアの乗る馬車の後に続く荷馬車の一角をあてがわれた。換え用の馬に乗ればどうかとも言われたが、振り落とされるのが目に見えているので断った。時々、黒服の男たちにまぎれて歩いたりしたが、彼らはユマのことを快く思っていないらしく、ろくに会話もせずに荷馬車に戻った。

「どこへ行くんだ？」

ユマが聞くと、アカアは周囲の景色を確かめるように幌をめくつてから言った。

「王都ですわ。実家に帰るんですの」

「君の父はローファンとかいう土地の主じゃあなかったのか？」

「確かにローファンに封じられましたたが、王宮勤めであるために王都に居をかまえていらつしやいます」

ユマは、アカアの父が彼女に似ていることを心底願った。得体の知れない術士が、実はただの難民　　というべきだろう　　であることがあればどうなるか。

（とにかく、食いつなぐことだ……）

そう思いながら、夜天の星を数えた。知っている星座はひとつもなかったが、やや欠けた月だけが、故郷のそれを生き映したように浮かんでいた。

第一章「原初の声」(5)

アカアに同乗しての旅は続く。

「ユマ先生は、面白い謡うたい方をされますね」

と、アカアが大真面目な顔をしたので、ユマは首を傾げた。

(歌を謡ったおぼえはないけど……)

思わず口に出そうとしたところで、心当たりがあることに気づいた。

アカアの放つ言葉だ。

ユマの放つそれと比べて抑揚が大きく、アカアのお喋りは鳥の囀さえずりのようにも聞こえる。彼女が謡っているように感じたことのあるユマは、この国の人間が持つ言語観が歌と称される程度のものであると考えた。

あの奇妙な妖精　とユマは断定している　のおかげで言葉が通じなくとも意は通じるのだ。故に言葉は個性であり、歌曲のように華やかさを伴う文化なのだろう。

ユマ先生は珍しい言語で話されますね。

と、言われたに等しい。

「そうか、俺の故郷でも(他と比べると)珍しい歌だそうだ」

ユマがわざとらしくそう言つと、アカアは決まったように手を叩く。もはやこのような問答は日課ですらある。

(可愛い娘だ……)

垢抜けない、筋金入りのお嬢様だ。清水を何度浄化すればこのような透明な液体が出来上がるのかと思うほどに、彼女の人格はまっすぐで、穢けがれがなかった。

(ちよつとお惚とほけさんらしい)

ユマの話に聞き入っているときは別として、時々、愚鈍とも思えるほどに鈍くなる。あえてそういう風に教育されたのかもしれないとも、ユマは思った。

そんな彼女に苛立ちを覚えなくもなかったが、ユマは彼女に聞いておかなければならないことがある。

夜中、光の群れがやってきて、俺に何かを授けて行った。あれは何だ？

という、直接的表現を用いることをしないのは、この男の奇妙さといえる。

「この辺りには蛸ほたるでもいるのか？」

ユマは妖精についてさりげなく訊いた。

「蛸……ああ、源精げんせいのことですね」

「源精？」

アカアが聞きなれないことを言ったので、ユマは脳内でそれを上手く訳すことができなかった。

（性能の悪い翻訳機みたいだな……）

源精と呼ばれるものから授かった神秘は、ユマがアカアの言葉を理解することを可能にした。だが、オロと呼ばれるこの王国にはユマの持つ語彙ごいを越えた概念や現象が存在しており、それらは生の音としてユマの脳に伝達される。「ゲンセイ」と、生の音で飛び込んできたそれは、ユマが本来の能力でもって翻訳したに過ぎない。ウィプロが辞書にない言葉を打ち込まれて誤変換するのと似ていると、ユマは思った。

（あるいは言精か……）

ユマは目でアカアに説明を請うた。

「源精は雷精より発し、人の意思を司ります。常は風精と混ざっています。が、人気を好み、人を介して彼らは増殖と衰退を繰り返します。ちなみに、風精は火精より発します」

つまり、源精とやらが人の意思疎通を援けるのは自らが繁殖を行うためであって、厚意でやっているわけではないらしい。繁殖を行うということとは源精は生物の一種ということになる。

アカアの話は続くが、それをユマなりに要約してみた。

風精とは風を起こす精であり、源精は普段それに紛れている。風に飛ばされて遠くに行く様は、あるいは蒲公英たんぽぽの種が風に乗る様を想像すると近いかもしれない。源精は意思を原料として動く。しかも、動物のような単調なものではなく、人間のように複雑怪奇なものを好む。

源精は群れで行動するが、一つの群体で繁殖を行えるのは一個体のみである。というより、アカアが言うには繁殖を行う際に、選ばれた個体は同群体内の他の個体を食い尽くすらしい。寿命は長く、取り付いた人間が意思活動を行う限り、彼らは生き続ける。一種の共生ともいえる。

（道理で団体さんでやってきたわけだ）

このような荒野では人も滅多に通るまい。妖精さんも子孫を作るのに必死だったらしい　と、ユマは小さなおかしみを感じた。自分の体内に何かが宿っているのは多少不愉快だが、害がなく、むしろ有益であれば我慢しよう。

まだ、問うべきことがある。

「この国では、俺のような変わり者が、突然現れたりすることがあるかな？」

哀れにも自分のように神隠しに遭ってしまう人間がどれだけいるのか。それは現在のユマにとって最大の関心事だ。もっとも、アカアがユマの服装を見慣れない時点で半分諦めているが。

予想通り、アカアはかぶりを振った。

「そうか……」

ユマが持っていたほのかな希望は、一瞬にしてかき消えた。知らないというのは、ユマのいた世界に戻る方法もわからないということだ。

（器用に生きなきゃいけない……）

ふと、思い出したのは、捨ててきた車のことだった。ユマのような奇人を受け入れるくらいだから、信仰や文化の差異によって人を廃絶するような陰しさはオロ王国にはないのだろう。

ユマはオロ王国について、数々の文化が花火のように炸裂する地に栄える国であると予想した。案の定、東西の大陸のほとんど中間に位置するらしく、東大陸の西端がオロ王国の領土であるらしかった。

また、貨幣経済もそれなりに発達しているらしく、車を珍品奇物として売りに出せば中々の値で売れるのではないかとも思った。他にもユマが持ってきた毛布はアカアが大絶賛したほどで、残念なことに彼女がものの値打ちには無頓着なせいで、どれくらいの価値があるかは分からないが、今のユマにとって捨ててきた車に数多くの財産があつたと言える。それを捨ててきた事実を猛烈に後悔しないのは、現在のユマがアカアによって保護されている安心感による。

ちなみに、今現在ユマの持つ財産は以下である。衣服は除く。

腕時計、銀色で無地のジップライター、煙草二箱、絆創膏と消毒薬、胃薬、毛布、発炎筒、キーケース、手帳、ボールペン一本、携帯電話、ペットボトル、工具数種、ショルダーバッグ、携帯ティッシュ三つ、ハンカチ、手提げ鞆^{かばん}、乾電池四つ。

発炎筒などは獣に襲われた時に焚こうと思いつてきたものだが、キーケースや乾電池に至っては何の役にも立たない。ユマの面白いところは荒野のど真ん中に車を捨て置くとき、きちんと鍵を抜いて来たことだ。習慣が抜けきらないのか、それとも狼や野鼠が車上荒らしのような真似をするとでも考えたのか、当の本人にもよくわからない。

四日目に人里が見えた。ここまで来ると、人に踏みならされた平坦な地面が顔を見せ始め、この地方の人は焼畑をするのか、時々禿げた山も見えた。

藁葺きの屋根が居並ぶ寂れた村で、険しい顔つきをした子供が牛を鞭打って畑を耕していた。

ユマはオロ王国の文明について期待が外れたと落胆したが、アカアの一言でどうにか持ち直した。

「ここは田舎です。王都まではあと十日ほどです……」

この日は村長らしき人の屋敷で泊まった。晚餐は粥かゆの様なものを出されたが、アカアを接待するためか、牛の肉も出てきた。

（まさか畑を耕していた牛じゃないだろうな……）

家産を傾けるほどの接待には見えないが、村長が地に額をつけてアカアを歓待する様を見て、ユマは不思議な気分になった。

「先生、お酒はいかがですか？」

村長の懐具合が心配になってきたので、ユマは一度断った。すると、村長の目に怨えんの色が見えた。

（はあ、もつと金を落としてゆけということか。それとも、貴族が浮かぬ顔で帰ったとなれば、後に響くのか……）

アカアが村長に支払う対価は、牛一頭より遙かに勝るのだろう。村長がローファン伯の娘をもてなす労苦は、対価を得て自らを潤す楽しみでもあるようだ。

「いや、いただこう」

ユマがそう言うと、村長の表情が晴れた。

村長の娘らしき少女が酒を注いだ。甘ったるくて、不味い。とても酒とはいえない代物だった。それ以上に、村長の娘がひどい不細工だったことが、酒を楽しもうとする者にはこたえた。鼻が臍へそを曲げたように上を向いていて、両の目がやや離れている。他の部分は目だって崩れてはいないが、その二つの要素が強烈に彼女を形作っていた。

風呂もあつた。ユマの期待は外れて蒸風呂だったが、旅の垢あかを落としたながら自分が生まれ変わったような気持ちになった。三日目あたりから頭が、昨日からは体の所々が痒かゆくなっていたから、ユマはそれも含めて入念に体を洗った。勿論、石鹸など無く、軽石でこするのだ。

突然、娘が入ってきた。さもありなん　　と思ったユマだったが、黙って彼女の思うがままにさせた。石で垢こすを擦るのが上手で、思わ

ず寢息を立てそうになった。

（不細工だが、中々悪くない）

勿論、^{ねや}閨を共にするのだけはお断りしたいが。

「お着替えをここにおいておきます」

村長の娘が言ったところで、ユマははつと我に返った。

「俺の服は、捨てたり、洗ったりしないでくれ」

少女たちが、川辺で石を打ちつけて洗濯を行っていた光景を思い出して、ユマはひやりとした。あんな手荒い真似をされてはスーツがずたずたになってしまう。

娘がいぶかったので、ユマは答えに窮し、適当なことを言った。

「正しいやり方で洗わないと、呪い^{まじな}が解けてしまうんだ」

「まあ！」

驚いた娘はまるで天衣を授かったかのように仰々しい仕草で、スーツをたたみ、奥へと消えていった。ユマは代わりに黒服たちと同じ服を着せられた。

一室をあてがわれて寝ようすると、村長の娘がついて入ってきたが、

「眠い」

といって退けた。娘は静かに泣きながら村長の元へと帰った。

（それに病気をうつされそうだ）

何の根拠もなく失礼きわまりないことを考えたユマだったが、見知らぬ土地に放り出される前の暮らしが病的に清潔であったことを考えれば、彼が田舎娘に偏見を持ったとしても責められないだろう。村長のため息が耳元で聞こえてきそうだったが、十分に稼がせてやったと思ったユマは、疲れが溜まっていたのか、泥のように眠った。

第一章「原初の声」(6)

明くる日の朝、集団の人数が増えていた。どうやらアカアが奴隷を二人買ったらしい。虚^{うつ}ろな目で大きな荷を背負^うう彼らを見たとき、ユマは薄ら寒い何かを感じた。

村を発つと、険しい山登りを強いられた。斜面を馬車で進むのはこんなにも無謀なのかと思うほどに重労働で、馬車を押していた奴隷が倒れて足を轢^ひかれた。

「何ちゆう光景だ……」

奴隷は足の骨を折ったのか、呻^{うめ}き声を上げながら苦しんでいる。

ユマはアカアと同乗していたが、奴隷を見たアカアがこともなげに凄^{すさ}まじいことを言ったので戦慄した。

「歩けそう？」

と、アカアが黒服を統べる男に訊くと、男はかぶりを振った。

「そう、では置いてゆきましょう」

ユマは最初、彼女の台詞を理解できなかった。まさかとは思うが、反芻^{はんそう}してみても信じられない。

「置いていくのか。山道のと真ん中で？」

ユマの口からこぼれる様に吐かれた台詞に、アカアは首を傾げた。

それが何か？

と言いたげである。

(やっぱり螺^{ねじ}子^こが一本抜けてんじやないのか。この女は……)

眼下では黒服の長が配下に指図をしていた。

「一日分の水と食料をここに置いてゆく。旅人に助けを請えば無事に山も下りられよう」

まるでそれが最大限の厚意であるような口調だった。奴隷の表情は見る見る青ざめ、共に買われた奴隷が仲間の助命を懇願するために、黒服の長の足にしがみついた。

「それはあんまりです。このままでは山を下りる前に山犬に襲われ

て死んでしまいます」

黒服の長が睨みつけると、奴隷はひるんだ様子だったが、同郷の者を守るうとする意識が強いのだろう。震える声を振り絞った。

「せめて、共に下山させて下さい」

目を潤ませて懇願する奴隷だったが、強引に腕を振り払われて地に伏した。

「仕事もせぬ。役にも立たぬ。その上で主に命令するのか！」

鈍い音が聞こえた。一瞬、目を伏せたユマだったが、再び彼らを見ると、奴隷の一人が鼻から血を噴いてもがいていた。周囲には黒服の男たちの他にアカアが元から連れていた奴隷もあり、彼らはおびえたり、目をそむけたりしながら眼前の光景が早く過ぎ去ることを祈っているようにも見えた。

アカアはというと、もはや彼らのやり取りには興味がないらしく、「先生、しばしお待ちくださいませ」

といって、退屈そうに本を開いた。

「っ！」

ユマはアカアを突き放すように車外へ飛び出すと、黒服の長の肩をつかんだ。

「やめろ」

黒服の長は驚いたようにユマの顔を見た。だが、すぐに口元が緩んだ。

（俺はこいつになめられているのか？）

ユマは直感した。

「これはこれは、先生。見苦しいところをお見せしました」

黒服の長は大仰に言った。慇懃^{いんぎん}な態度が腹立たしかったが、ユマは耐えた。

（この髭^{ひげ}つ面^{つら}の名前は何だったかな？）

と、アカアが黒服の長のことを何と呼んでいたかを思い出そうとした。

「ヌル？」

飛び出したユマを目で追ったアカアが、男の名を呼んだ。

（そう、ヌルだ。いかにも悪人っぽい名前しやがって……）

顎鬚あごひげのたくましい、長身の男だ。痩せているように見えるが、無駄な脂肪をすべてそぎ落とした様な強さが体貌たいぼうから滲み出てくるようでもある。歳は三十の半ばあたりだろう。

目を見れば気圧されるのは分かっていたから、ユマはヌルの目を見ずに言った。

「こいつは金を出して雇ったんだろう？ 雇い主なら最後まで面倒を見る」

ユマの口調に棘とげがあつたためか、ヌルは思わず反論した。

「雇ったのではない。買ったのだ！」

ヌルの言葉を聞き流したユマは、地に伏せた奴隷たちの前まで歩いてゆくと、屈んで顔を覗き込んだ。

（若い……）

どちらも十四、五の少年である。ユマは自分の腹の底で、何かが沸々ふっふっと煮えてくるのを感じた。

「先生？」

アカアが幌をめくって車内から出てきた。

（あの世間知らずを説得したほうが早い。いや、この髭に軽く見られると後が怖い）

ただでさえ素性の怪しい男がアカアの客として迎えられたのだ。

この先、ユマが何かの失態をおかしてアカアから疑われた場合、ヌルという男は真っ先にユマを放逐ほうちくするだろう。ここは是が非でもアカアに先生と呼ばれる者らしく振舞わねばならない。

「その子を馬車に乗せろ。俺が歩く」

ユマが奴隷少年を起こそうとすると、少年は驚いたような顔でユマを見た。

「何も先生がそんなことをなさなくても……」

やはり、アカアには理解できていない　と、ユマが軽く失望を覚えたとき、今度はヌルがユマの肩に手をかけた。

やめよ。

と、目で言っている。刺すような視線に敬意などは微塵も込められていなかったが、このことが逆にユマを挑戦的な気分させた。

このままでは少年は死ぬ。旅人が通るといつていたが、それも何日に一回の話だろう。もし、現れなければという想像をアカアはしないのか。それに旅人が彼らを助けるという保証もない。金目の物など持っていないから、追い剥ぎ^はには遭わないだろうが。

ユマは誰を見るでもなく、声を張って言った。

「このままではこの子は死ぬ。それがわかっていながら、何故捨てて行くんだ？ さつきヌルは旅人に助けてもらえと言ったが、旅人が現れなければどうする」

ヌルに対して言ったようでもあるが、これはやはりアカアを非難する声だろう。それに気づいたのか、アカアは先生の不機嫌をなだめたいがために、ヌルの方を見た。彼はやれやれ、といった口調で言った。

「運がよければ、必ず助かる」

この言葉を聴いた瞬間、ユマの脳裏に、^{まぶた}瞼に落ちてくるような蒼穹と、荒涼の大地が広がった。たった二晩だけであるが、ユマは闇の中ですすり泣く様な旅を行ったのだ。他の誰かが自分と似たような境遇に陥ることが、耐えられなかった。かわいそうなのではない。絶望的な状況から自分を救ってくれたアカアという少女が、実に酷薄な人であったことが、残念でならないのだ。九死に一生を得るという言葉があるが、ユマはアカアが現れたことで、十死^{じふし}ぬはずだった命を拾ったのだ。あの時の喜びに泥をかけられたような気分は、他の誰かと共有できるようなものではない。

（俺を助けたのに、この子は助けようとしな。いつか、俺も捨てられるかもしれない）

ユマが激昂した理由は義侠心によるものだったが、彼が行動したのは、実は己が身の危うさに気づいたからであるかもしれない。だから、ユマの憤りは嘆きにも似て、風が空吹いているような気分が

あつた。

「運がよければ助かるというのは、ほとんど死ぬってことだ。つい昨日まで畑を耕して安穩に暮らしていた少年を、自分の都合で連れ出して、使えなくなつたから捨てるっていうのはどういう了見だ？」
ヌルの胸倉をつかみそうな勢いだった。ヌルの目は冷ややかだったが、これにはアカアが焦つた。

斬つてもよろしいか？

と、ヌルが目で問うてきたからだ。今、ユマに死なれると退屈な旅の話し相手がいなくなってしまう。

「先生。わかりました。馬車に乗せましょう」

アカアがそう言った事で、場はおさまった。ヌルはすれ違いざまに、

「連れ出したのではない。買ったのだ……」

と、呟いた。ユマの怒りはまだおさまっていないが、これ以上ヌルと話をしたとは思わなかった。

「大丈夫か？」

そういつてユマは足を折つた少年に手を差し伸べた。

「馬車に乗せる。手伝つてくれ。他に治療の出来る奴はいるか？」

とユマが言うと、二人が少年を抱えて馬車に運んだ。鼻血を出していた方の少年はどこからか棒切れを拾つてきて、車輪に轆かれた少年の足にそえ、軽い治療を行った。ユマはポケットから携帯ティッシュを取り出して少年の鼻を拭いてやり、足を折つた方には消毒薬を持ってきて車輪に擦られた傷口を拭いた。二人は不思議そうな顔をし、辺りにいた者もそうであつた。

「ありがとうございます」

一人は地に額を擦りつけ、もう一人は車上から会釈をしてユマに謝した。

「なに。困つたときはお互い様だ」

月並みな台詞を吐いたユマだが、悪い気はしなかった。

この後、集団におけるユマを見る目が変わった。

奴隷たちから見られるとき、敬意にも似た清々^{すがすが}しい何かを感じるようになった。逆に、黒服の男たちからは一層毛嫌いされたようだ。とはいえ、彼らの全てがヌルと同調している様子でもなく、ヌルより年配の男は食事時にユマの傍に寄ってきて、話しかけてきたりした。

「貴族のお嬢様をしかりつけるとは、あんたは本当に仙人なのか？」
水筒を片手に干し肉を齧^{かじ}りながら聞いてくる。どうやら、黒服たちの間ではユマはそうに見られているらしい。

「災難に遭って他人に助けを請う人は、他人が災難に遭ったときに助けをよこすとは限らない。どうしてだろうな？」

まるで自分に問いかけるような言葉だった。自らの正しさをほのかに主張してもいる。

鼻血を噴いた方の少年は、誰に命じられるわけでもなくユマの世話をするようになった。アカアはこれにも無頓着だったが、時々幌をめくっては、奴隷少年と共に歩くユマを見下ろした。

少年の名はリュウといった。ぼさぼさの髪に土色の衣を着ている。目が大きく、一種の愛らしさがある。もう一人はハウと言い、リュウより背が高く、目が細い。

「竜か。強そうな名だ……」

ユマがそう言った時、少年の目が輝いた。

「俺の故郷ではそういう意味を持つんだ」

おそらくユマがリュウという音に竜を想起したがために、源精が竜という言葉を少年に伝えたのだらう。後でアカアに訊いたところ、どうやら竜は存在するらしい。滅多に人前に現れず、巨大な力を持つという。ユマの脳内で描かれる竜の像とあまり変わらないように思えた。

「先生の故郷では、ハウはどのような意味でしょうか？」

リュウがついでに友人の名のことを問うた。

「鳳^{ほう}は王者の鳥だ。つがい^{つがい}で、鳳^{おう}という鳥とあわせて呼ぶことが多

い」

足が痛むのか、ホウは苦しそうな顔をしていたが、一瞬だけ口元が緩んだ。

多少なりともつまらぬ知識を仕入れておくものと、ユマは自分に対して感心したが、車上からそれを見ていたアカアがユマを招きよせ、

「わたくしは何という意味ですか？」

と聞いてきたために、先の争いのことなど頭からすっ飛んでしまった。

「さあ、どうだろう……」

ユマは山間から眩しくもれてくる夕光に気づくと、指でアカアの視線を誘うように言った。

「……赤いという意味じゃあ、駄目かな？」

そう言われたアカアは少しの間、感じいったように夕空を見ていたが、何を考えたのか、今度は近くを歩いていたヌルの方を指差して、

「彼は？」

と、小さな声で言った。

ユマは一瞬嫌な顔をしたが、アカアに当たるのも理不尽だろうと思ひ、表情を戻した。

「よくわからない」

「そうですか……」

アカアが少しだけ残念そうな顔をするので、ユマは付け足した。

「いや、『よくわからない』という意味だ」

少女の口から小さな笑みが漏れた。無骨で普段何を考えているかわからないヌルだから、アカアもおかしみを感じたのだろう。

ヌルは一部始終を見ていたらしく、軽く舌打つと、険しい顔つきで黙々と歩き続けた。

第一章「原初の声」(7)

道中、雨に遭ったために予定より少々遅れての下山となった。

下山してからは石畳で舗装された道路が目につき、車上の旅は快適になった。もっとも、ユマが乗るはずの荷馬車は負傷したホウが占領しているから、ユマは歩いての旅になる。

一行が歩を進めるのは早朝から日が暮れるまでの間に過ぎない。それでも歩きなれないユマには辛く、靴擦れと血豆が何度も潰れてほとんど歩けなくなった。アカアに呼ばれる場合も多いから、実際にユマが歩く時間は日に四時間程度だが、それでも三日目には苦痛と疲労で顔面が蒼白になり、共に歩くリュウを慌てさせた。

足が棒になるというが、悪路を歩いている間は棒になった足が磨り減るような、あるいは砕けるような感覚がなくて、いくつかの街や村を通り過ぎてもユマの目には何も映らなくなった。

「旅をされたことはないのですか？」

アカアはユマの軟弱さをあざ笑うわけでもなく、ただ、下々の者が出来ることを術士であるユマがこなせないのが不思議で仕方がないらしい。

「俺の故郷では、遠出をするのにわざわざ歩く奴なんていなかった」

ユマはつい、本音を漏らした。

「馬車にお乗りになるんですか？」

アカアは少し驚いた後に、何かを理解したような顔をした。なるほど言動は少々雑なところがあるものの、ユマの持つ知識は明らかに異質であり、更には姓を持っているということはどこかの地の豪族である可能性が高く、確証はないものの、これらの想像はアカアを楽しませるには十分だった。

「馬車がこんなにいるさい乗り物だとは思わなかった」

ただ蹄つづみの音と馬が鳴く分だけうるさいと思っていたが、車輪や車体が衝撃を吸収するような構造を持っておらず、激しく揺れた。そ

れに、日中でもカーテンを閉めてしまえば車内は暗く、とても乗れたものではない。

「今まで酔わなかったのが不思議なくらいだ」

気分が悪くなればアカアに断って歩いた。光るような風が気持ちよかったのは最初だけで、次第に足が潰れるような激痛との格闘になる。

「初めて馬車にお乗りになりましたの？」

「ああ、車があればよかったのにな……」

ユマはアカアと会話をしているが、人の話を聞かない性格もあいまって、一人ごちるような口調になった。アカアの目が鋭くなったことに、気づくわけもない。

（こういう時、先生は面白い話をしてくださる）

数日の付き合いではあるが、アカアはユマの人格の面白さに気づいてきた。

「牛車ですか？ それとも犬とか。まさか……竜？」

「違う。違う。あんな（竜は知らないけど）鈍いのと一緒にするな。燃料で動く車だ」

アカアが理解できなそうな顔をしたので、ユマは自動車について簡単に説明した。

「先生は火術を扱われますの？」

アカアは驚きを込めて言った。

「そうじゃない。あれは機械だ」

話が弾んで、次第に電車や飛行機の話になった。アカアは半信半疑の上にほとんど理解できないようだったが、最後にユマが言った言葉を聞いて、瞠目した。

「乗り捨ててくるんじゃないか、なかったな……」

馬車が一瞬だけ浮いたような感覚がした。車輪が小石を踏んだらしい。

「あるのですか。その……自動車というのが？」

「あるよ。君と会ったところから少し離れた場所に置いてきた」

「野ざらしですか？」

「砂が少し気になるが、一月も放っておかなければ、まあ大丈夫だろう。完全に壊れたわけじゃあないだろうし」

アカアの目が爛々らんらんと輝いた。

戻りましょう！

と、いいかねない顔つきだったが、どうやらすんで飲み込んだらしく、

「取りに行けるように、父上に相談してみます」と言っただ。

アカアと出会ってから八日目に広い盆地に出た。途中でユマが熱を出したため、立ち寄った街に二日ほど滞在した。

（便所とベッドがあるのがこんなには有難いと思っただのは初めてだ……）

道中、用を足す時も集団から離れすぎないように気をつけねばならず、たとえ離れたとしても、見晴らしのよい平野でしゃがみ込んでいる姿が丸見えなのは羞恥の極みだった。アカアはどうしているのか、そのような姿を一度も見かけなかったが、侍女が朝方に小型の甕かめを馬車から持ち出すのをみて納得した。

（なるほど、道理で香を焚くわけだ……）

ユマは甕に跨っているアカアを想像して 下卑た想像だが

小さく嗤うと同時に、妙なところで感心した。さらに単純な興味と切実さもあいまって、

（みんなどうやって拭いてるんだろう？）

という、子供じみた疑問をアカアの前で口に出しそうになったことがある。後でさりげなくリュウに聞くと、

「その辺に落ちてる石や葉っぱですが……」

と、当然のように答えられたので閉口した。ユマが体調を崩したのは、やはり野宿が原因だろう。

熱を出したユマはアカアの厚意がうれしかったが、ヌルにますま

す軽く見られるようになった自分に嫌悪を感じている。

（どこもさびれた街だ……）

千人程度が暮らしているに過ぎない、小さな集落に着いた。

聞くところによると、ここはそれなりに賑わっているらしい。その証拠にリュウは目を輝かせながら街を見てまわり、逆にホウは萎縮している感じだった。行商人が小さな天幕を張って地方から仕入れた品を開いている。さすがに街の中央を突っ切る路地は人で埋め尽くされて馬車も通れない感じだったが、それでもユマの目を圧倒するほどの厚みはない。

陳列された品々も、確かにユマの目には奇妙に映るものが多かったが、光沢や清潔感に欠けていて、どれも埃をかぶっているようにしか見えない。

（田舎者ではないらしい……）

露天に並ぶ品々には目もくれず、人ごみを無表情に見下ろすユマを、ヌルはじつと観察していた。アカアの護衛が彼の任務である以上、ユマという人間を見定めなければならない。

「退屈か？」

珍しく自分に話しかけてきたヌルを見て、ユマは少し驚いたようだったが、あえて感情を殺した声で答えた。

「そうでもない。王都はここより大きいのか？」

「無論」

「そうか。王都の人口はどれくらいだ？」

「詳しくは知らないが、二、三十万はいるはずだ……」

ヌルは言葉を濁した。ユマの質問はどこかの的外れているような気がする。

（まあまあだな）

百万都市に住んでいたユマの中では、数十万と言う人口を大都市と言い切ってしまうには少し寂しい。もっとも、王国の規模がどの程度なのかすら知らない以上、感覚としてそう捉えたに過ぎない。

「市にあまり興味がないようだが」

「無くもない。ほら、あれだ……」

ユマが指差したのは、家屋の屋根や天幕に飾られている紋章だ。波を意識したようなうねりの中で一人の女性が鎮座している。

あれは何かな？

とまでは言わずに、ヌルの言葉を待った。

「精泉せいせんの紋のことか？」

「精霊の泉なのか？ 泉の精霊ではなく？」

「何を言っている。泉に精霊などいるわけなからう」

ユマにしてみればヌルの言ったことは理解できなかったが、この男と会話を続けることに抵抗を感じたのですぐに切り上げた。

「ええ、確かに精泉の紋ですが……ご存知ありません？」

と、街を出発した後にアカアに問うても同じような反応をされた。

「知らないな。俺、異国人だし。神なのか？」

最初こそアカアを警戒したユマだったが、この頃は忌憚きたんなく彼女に問うようになった。

「違います。王都の一角に精霊が湧くといわれる泉があります。今は水ばかりが湧いています。上古、泉を訪れた旅人に光の精霊が宿り、王者となったという伝説があります」

「それがオロ王か……」

「そうです。オロとは光と同義です。今でも王のことを光王けいおうと呼びます」

アカアの話によると、オロ王家の初代は女性だったようで、紋章は初代光王が光精に祝福される様を描いているらしい。ここまでは理解したユマだったが、ヌルとの会話を思い出し、重ねてアカアに問うた。

「光の精霊は泉の精霊とは違うのか？」

「泉の精霊……とはいかようなものでしょう？」

「そうだな。俺の故郷では（といっても故郷からもちよつと遠いが）泉を訪れた者を試し、答えを得たものを祝福するといったところか

な。ある日、正直な樵^{きこり}が誤って泉に斧を落とした……」

「いって、ユマは自分の知る物語をアカアに話した。」

「それは精霊ではなく、妖怪です。精霊が人を試すだなんて聞いたことがありませんわ」

アカアが笑うのをみて、ユマは彼女のいう精霊というのが、意思を持たない現象であるような気がした。風が吹く、火が燃えるといった現象は精霊と呼べるが、悪人に雷を落したり、たた^{たた}りをおこしたりするものを精霊とは呼ばないらしい。

（精霊だの術だのと言っているが、この世界も中々に醒^さめてる）

迷信に支配されていないという醒めがある。科学とは違った方向に人類が進化し、このような世界ができあがったのか。ユマにとってアカアを含めるオロ王国の住民は、奴隷制度をはじめとしてまるで未開であり、古風にも見えたが、その考えを改めるべきかもしれない。

「それに――」

アカアの話が続いていたことをすっかり忘れていたユマは、驚いたように彼女の顔を見た。

「水に宿る精霊はありません」

これについては何故かを問うても無駄だった。水に干渉する精霊はいないというのが、アカアの持つ常識のようだ。

第一章「原初の声」(8)

王都に至ったのは、ユマが突然荒野に放り出された日から数えて十八日目である。アカアの予定より二日遅れての到着となった。

広々とした平野の中で、蒼穹を貫くような高い宮殿が見えた。なるほど、オロ王国は小国ではないと思わせるような堅固な城門が見え、その外側に城下町が並ぶ。道中で立ち寄った町々はまず城壁があり、その中に人が住んでいたが、王都は夥しいほどに犇く人々を収容しきれないのか、宮殿の外に街があり、その外にまた村々があり、その外に田園地帯が広がっている。まるでいくつもの都市が歩いて王都の傍に腰を下ろしたかのようでもある。

この巨大な都市の名を

「リヴォン」

という。

(ははあ、リボンか……)

ユマは丘の上から王都を見下ろした時、妙なおかしみを感じた。遠望すると王都の北は山脈が腰を下ろしており、西に流れる大河がうねり、王都の南方を守護している。ユマの歩いてきた東には広大な平野が広がっている。天嶮に包まれたこの都市は、北側に宮殿があり、それに結ばれるようにして東西に大きな城下町がある。上空から見下ろせば、結んだりボンのようにも見えらるだろう。

更に、遠くに見える河の色だ。深い紅色をしている。

「紅河です。上流に八本の支流があり、八尾ともよばれています」

気味悪そうに河を遠望するユマを見て、アカアが言った。

「渡来人にはちよつとばかり不吉だな……」

アカアが首を傾げたが、ユマは顔をしかめたままでこれ以上言葉を発しなかった。

さて、王都である。

東西に展開した城下町はいかにもといった風情で、ユマが足を踏み入れた東の城下町は活気に満ちていた。東西の町にはそれぞれ名があつて、西を「リ」、東を「ヴォン」をいうらしい。オロ王国には一時期を除いて遷都の歴史はないから、これら二つの集落が王国の出発点であつたのかもしれない。

繁華街らしき場所も遠望できるが、筋金入りのお嬢様であるアカアがそんな場所に足を踏み入れるはずもなく、ユマは丁寧に舗装された石畳の道路に感心しながら、過ぎ行く建物や人々を観察していた。煉瓦で固めた五階建ての集合住宅のようなものも見えるが、瓦葺の東洋風な建物もあつた。

「やっぱり奴隷がいるな……」

地域だけの古びた習慣であればと淡い期待を持っていたが、どうやらそのようなはずもなく、ユマは酷使される奴隷を見るたびに不愉快な気分になつた。

「秘書奴隷というものもあります」

憚然となつたユマを見たアカアが、何も奴隷の仕事が肉体労働に限らないことを示唆したが、

「彼らには自由がないんだろう？ それじゃあ、奴隷に変わらない」と、一蹴された。

「明日、王都を案内してさしあげますわ……」

アカアにそう言われたこともあつて、ユマは熱心に観察することをやめた。旅疲れがそうさせるのだろうが、彼が窓の外を見ていた姿を驚いたように見上げていた奴隷がいたことに気づかなかつた。

いつの間にやらローファン伯の屋敷に着いたようだ。日も暮れ、ヴォン北部の高台にあるその場所は静かな空気の中で豪華な光を放っているようにも見えた。

（思ったほど大きくないな……）

と思つたのは屋敷の大きさに対してで、敷地自体は相当に広い。左右対称に作られた白壁の美しい建物で、中におびただしい数の燭しほくたい

台を想像してしまうように、窓から光が漏れている。

訪問客を威圧するかのような鉄製の門で、ユマは馬車を降ろされた。車上姿で敷地内に入ったのはアカアただ一人である。

馬車を追って歩いてゆくと、使用人らしき人々が屋敷の前で整列している。

「おや、メイドがいるじゃないか」

と、傍らで歩くりユウに話しかけたが、田舎から出てきたばかりの彼の耳には届いていないようだった。

黒地の衣服はヌルを髻髷ほうぶつさせるが、彼のように運動に優れたつくりではなく、下部はスカート状になっている。その上に白のシャツを着ていて、服が緩まないように引き絞っているようだ。頭には力チューシャのようなものをつけていて、人によって白や黒と色が違う。ユマの目にとまったのは女性の格好だが、男に關しても下がズボン状のものを穿いているだけであまり変わらない。

彼らとは全く違う、黄色をベースにした緩やかな衣服に身を包んだ女性がいる。少々肉つきがよく、小太りと言ってよいが、温和な空気が体貌にあらわれている。髪は後ろに団子に纏めていて、やはり赤い。

「お母様！」

アカアは馬車から飛び降りるようにして、母に走り寄った。

「アカア、健やかで何よりです。ですが、馬車から飛び降りるのはおやめなさい」

声がやわらかい。母にたしなめられたアカアは小さく畏かしこまると、母の目を盗んでユマの方を見、舌を出した。

「そちらの方が？」

アカアから既に使いを出していたのか、ユマの存在は既に母の知るところだったようだ。

「術士のユマ先生です」

予想通りの紹介をされたユマは、ローファン伯爵夫人に軽く会釈をした。ユマが簡素な挨拶を行っただけなのを見て、彼女は少し驚

いたようだった。

（跪くべきだったかな？）

だが、ここで慌てて慇懃な態度をとっても侮られるだけだろう。

「先生はどちらのご出身ですか？」

「東京です。ちなみに私は術士ではなく、学者です」

術士などという虚妄は、すぐにはがれる。そう思ったユマは、ここで自分に対する誤った印象を拭い去ることにした。学者と自称したのは自分がこの世界の人間があまり知らぬ思想を持っているからという淡い自負からだった。ただ、ユマの持つ知識は小説や劇画から荒く学んだ半端なもので、それが異文化から見れば有益ではないことには気づいている。しかし彼の持つ財産は 例えばアカアがユマの毛布を絶賛したように、ある程度はオロ王国の文化と折り合いをつけることができるという予測がある。早い話が、とりたてて手に職もないユマが異文化の中で生きていくには舌先三寸を駆使する以外に道がないのだ。

「トオキヨオ……聞きなれない名ですね」

「当然です。地の果てより遠い……」

これにはアカアが助け舟を出した。勿論、ユマを助けるつもりなどもなく、彼女はユマと話すうちに導き出した自論を披露したかっただけのようだ。

「古典にある、『十の太陽が昇る都』ではないでしょうか。いくつもの海を越えた東の果てにそのような地があると読んだことがあります。先生にお話したところ、先生の故郷では古くは十の太陽があったという伝説があるとのことですよ」

アカアは得意満面だったが、十の太陽が同時に昇るという伝説はユマの故郷にはない（あるかもしれないが少なくともユマは知らない）。ただ古代の大陸人が太陽を十種に分け、それぞれに名をつけていたことをユマはどこかで読んだ記憶がある。

そのような遠方から何のために？

伯爵夫人の目がそう問うている。

「西方のことを知るべく、旅をしておられるとのこと、しかし道中、自動車自動車が故障し、立ち往生されていたところを私が通りかかったのです」

この後、アカアが自動車について力説したために、妙に長い立ち話となった。伯爵夫人もこれには興味を示し、すぐに回収に当たらせることを約束した。

ようやく、ユマは屋敷に入ることが出来た。

（会話の手ごたえ次第では俺を追いつもりだったらしい……）
アカアの客人であれば食事時にでも問えば済む話だろう。それをわざわざ邸宅の前で行ったところに、伯爵夫人のユマに対する警戒感があったことは確かだ。伯爵夫人本人がユマとの会話を行ったことから、アカアが自分に対して好意的に解釈した情報を夫人に与えたことは間違いない。彼女を警戒させる何かは、これはユマの直感だがヌルが吹き込んだものかもしれない。

あの者は他国の間者かもしれないとせぬぞ。

くらいのことは言ったかもしれない。だが、同時にヌルはユマがあまりにも旅慣れていないことに疑問を持っただろう。それから導き出される答えは一つしかない。

「車が……」

乗り物と言えば馬車しか知らない人々を驚愕させるには十分だろう。

（車が見つかれば、とりあえずは安泰かな……）

ユマはそう樂觀した。

後で知らされたが、どうやらローファン伯は留守のようで、自分の安全を確保するにあたって最大の難関をひとまずは回避することが出来た。ローファン伯がどのような人間か、ユマは知らない。アカアの人物評はあてにならず、だが伯爵位についている以上、愚鈍でもあるまい。彼が異邦人に対して寛容であるかどうかは、使用人には聞けない。嗅ぎ回っているという事実がマイナスに働くことを恐れたのだから、ユマの臆病さはどこかの外していて滑稽ですら

ある。

「車は重い。馬車の三倍は考えたほうが良いですよ」

食事に招かれたユマは、伯爵夫人に忠告した。ユマが車を乗り捨てた場所は他の領主の支配下であるようで、伯爵夫人がそれを警戒したからだ。

「それに、鍵がなければ動かない」

ユマはキーケースから出した鍵を見せびらかした。ちなみにユマは伯爵夫人が人をやったとしても車を回収できないと思っている。何より故障している上に燃料の問題で後数キロ走ればがらくたなることと、視覚的な印象を与えるだけでよいと思ったからだ。

「それが鍵なのですか？ 装飾だとばかり思っていました」

自分の知らないことがまだあったことに対して、アカアが恨めしそうに言った。

ユマは長方形に近い円卓の端の席についている。逆端に伯爵夫人が座り、横向きにアカアがいる。それなりに声を張らなければ会話にならない。

ユマが閉口したのは、二人とも素手で食事を行っていることだった。

（そりゃあ、西洋では結構な時代まで素手で食っていたような話を聞くが……）

箸もなく、それを必要とする料理もない。おっもの羹ばかりはレンゲのよ
うな底の深いスプーンですくうことが出来るが、他が壊滅的に不慣
れだ。左横でメイドが手洗い用の水を汲んだボールを持っているが、
ユマは肉切れを一つ口に運ぶごとに、神経質に手を洗った。メイド
はよく教育されているようで、不満を顔に出すようなことはなかつ
た。

メイドの美しさはアカアには劣るが、目元にアカアには無い強さ
が見える。自我の強さである。誇り高いというわけでもなく、職務
を忠実に行うというまっすぐな気持ちがあらわれている。背は少し

高く、髪は黒い。体を引き締めるような衣服が、彼女の体が引き締まってしかも豊かであることを強調している。

（こいつを伽とぎにつけられたら抱いてしまいそうだ……）

と、ユマはメイドの顔をしげしげと眺めながら思った。メイドはユマの視線に気づくと、ユマにしかわからないような微かなほかにかみを見せてから、目を伏せた。

例のごとく、蒸風呂に入ったとき、同じメイドがユマの垢を擦りに来た。

「リンと申します。至らぬところがございましたら、何なりとお言いつけ下さいませ」

垢を擦られて良い気分になりながら、ユマはふと、今の自分が奇跡的に生き残っているに過ぎないことを思い出した。

（あの時、アカアと出会っていなければ……）

この後、ユマはあらゆる場面で同じ台詞を心中で吐くことになる。それが自分にとって足かせになるとは知らずに。

ローファン伯はどういう人かな？

喉まででかかった言葉を、ユマは飲み込んだ。使用人が主人を批評するわけがない。

「君も車を見たいのかな？」

あえて違う話題を切り出した。

「はい、馬もなしに自力で走る車というものには興味がございます」
「乗ってみたいか？」

「いいえ、わたくしなどは……」

「そうか……」

この言葉を最後にユマが黙ってしまったので、リンは彼が機嫌を損ねてしまったのかと不安になったが、少しすると寝息が聞こえてきたので、胸を撫で下ろした。

寝ぼけ眼のまま、寝室へとたどり着いたユマだったが、アカアと出会った幸運がこの日の内についていたことには気づかなかった。

一章「原初の声」了
二章「闘士衝冠」へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5984z/>

貴く翔べ

2011年12月20日19時45分発行